

ALIC/MLA 定期情報交換会議の概要について

独立行政法人農畜産業振興機構

このたび、独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は、豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）と定期情報交換会議を開催しました。

本会議は、日本、豪州の牛肉の需給状況等について意見交換を行う場として、両国において原則として毎年度交互に開催しており、今回で通算22回目となります。

1 日 時：平成25年11月26日(火) 10時～12時

2 場 所：ALIC会議室

3 参加者

ALIC 佐藤理事長、強谷総括理事、渡邊理事、高橋総括調整役
新川調査情報部長ほか

MLA ミシェル・アラン 会長
ピーター・バーナード 貿易・経済部 統括部長
マイケル・フィヌーカン 韓国代表兼臨時日本代表

4 会議内容

佐藤理事長とアラン会長の挨拶の後、ALICから日本の牛肉需給について、MLAから豪州の牛肉需給について説明し、意見交換を行った。

<ALICからの牛肉需給についての説明概要>

日本の直近の牛肉の生産・消費動向、今後の生産予測、東日本大震災が畜産に与えた影響、日本の牛肉輸出動向等について説明。

<MLAからの牛肉需給についての説明概要>

(1) 生産動向

- ・ 2013年は乾燥気候の影響から、と畜適齢前の出荷が増加し、と畜頭数は前年比13%増の820万頭となる見込み。
- ・ 1頭当たり枝肉重量は、278キログラム（前年比10キログラム減）と見込まれているものの、と畜頭数の増加から、結果的に牛肉生産量は232万トン（枝肉ベース）と、増加する見込み。
- ・ 2014年1月までは、乾燥気候が続き、草地の回復は見込めないものの、2013年の飼養頭数は、ほぼ前年並みであり、今後も横ばいで推移する見込み。

(2) 輸出動向

- ・ 牛肉輸出量は、生産量増加に伴って増加傾向にある。最近は、日本、米国、韓国の主要3カ国以外への輸出が増加しており、特に中国、中東向けなどの輸出が増加している。こうした新興市場における需要の伸びは今後も続く見込み。
- ・ 中国向けは大幅に増加し、2013年は約15万トンの見込み。主な部位はシン・シャンク（すね肉、全体の19%）及びブリスケット（ばら肉、同18%）である。現在、中国市場における豪州産のシェアは最も大きい。今後、ウルグアイ、ブラジルなど他国との競合を予想している。

(3) 日本市場に対する関心事項

- ・ 米国産牛肉の輸入月齢緩和を受けて、2013年の日本への豪州産牛肉の輸出量は減少し、今後も減少傾向で推移する見込み。現在の水準は、BSE発生による米国産牛肉の輸入禁止前（1990年代後半頃）とほぼ同水準。
- ・ 2007年以降、豪州産牛肉の日本向け輸出量は、冷凍品が冷蔵品を上回って推移している。日本の消費者の経済性志向により、より安価な冷凍品が好まれているためと認識している。
- ・ 日本向け輸出量を部位別に見ると、米国産ショートプレートの影響で、特にブリスケットの輸出が減少している。また、特定の部位が好まれるようになり、フルセットの輸出も減少している。
- ・ 日本向けの牛肉輸出において、グラスフェッドは一定量を維持しているものの、グレインフェッドは、米国産牛肉増加の影響を受けて減少している。しかしながら、豪州からのグレインフェッド輸出全体において、依然として日本向けは圧倒的なシェアを占めており、今後も一定のシェアは維持すると見込む。

(問い合わせ先)

担当者：調査情報部 西村、伊藤

電話番号：03-3583-4391、8105